# 2008 年度
# 日本機能言語学会春期例会

## JASFL2008

The Spring Workshop of
the Japan Association of
Systemic Functional Linguistics

**2008 年 4 月 19 日**
April 19, 2008
**杏林大学(八王子キャンパス)**
Kyorin University (Hachioji Campus)

# 日本機能言語学会　2008 年度春期例会プログラム

会期：4 月 19 日(土)
会場：杏林大学　八王子キャンパス：E 棟 207 教室

1:30 – 1:45　受付　　2F ホール

2:00 - 2:20　オープニング
南里敬三（大分大学）
「システミック理論に隠れているテクスト構造分析」

2:20 - 2:45　研究発表 1
長沼美香子（立教大学）
『日本語と英語間における翻訳から再考する「名詞化」』

2:45 - 3:10　研究発表 2
佐藤勝之（武庫川女子大学）
「漢文（文言）の過程構成・テーマ構造と結束性」

3:10 - 3:20　休憩

3:20 - 3:45　研究発表 3
船本弘史（北陸大学）
「インターパーソナルからのテクスト分析」

3:45 - 4:10　研究発表 4
鷲嶽正道（愛知学院大学）
「アプレイザル分析の困難：誰が価値付けをするのか」

4:10 - 4:20　休憩

4:20 - 5:00　全体討論
「これからの方向性」

6:30 -8:30　懇親会　「居酒屋イタリアーナいたすけ」　会費：￥5,000

# The Program of JASFL 2008 Spring Workshop

Date: April 19th (Saturday), 2008
Venue: E-Building, Kyorin University, Hachioji Campus

1:30 – 1:45 Registration 2F Hall

2:00 - 2:20 Opening
Keizo Nanri (Oita University)
"Text Structure Analysese Hidden in Systemic Theory"

2:20 - 2:45 Paper Session 1
Mikako Naganuma (Rikkyo University)
"Rethinking nominalization in Japanese/English translation"

2:45 - 3:10 Paper Session 2
Katsuyuki Sato (Mukogawa Woman's University)
"Transitivity, thematic structure, and cohesion in classical Chinese texts"

3:10 - 3:20 Coffee Break

3:20 - 3:45 Paper Session 3
Hiroshi Funamoto (Hokuriku University)
"Text Analysis from Interpersonal Viewpoints"

3:45 - 4:10 Paper Session 4
Masamichi Washitake (Aichi Gakuin University)
"Difficulties and Problems of Appraisal Analysis: Who evaluates appraisals?"

4:10 - 4:20 Coffee Break

4:20 - 5:00 General Discussion
"Our Future Direction in Systemic Exploration"

6:30 -8:30 Conference Dinner A Casual Italian Restauralt, Itasuke
Fee: 5,000 yen

オープニング　Opening

# システミック理論に隠れているテクスト構造分析

大分大学
南里敬三

システミック理論（シドニー文法）の骨格は 1978 年出版の『Language as a social semiotic』によるコンテクスト理論の提示、1985 年出版の『An introduction to functional grammar』による語彙文法の整理で「完成」を見、それ以降の論理的展開は既存の論理的フレームワークの細分化と整備であると言える。これからシステミック理論がどのように発展していくのかは、この論理的フレームワークの強度、および、細分化されたサブ理論の整合性のとれたさらなる発展にかかってくる。本発表は、サブ理論の中に隠れているテクスト構造分析を取り上げ、システミック理論が今後実りある発展を実現していくために、その隠れたテクスト構造分析がどのような方向に進むべきであるかを示唆するのを目的とする。システミック理論の全体構造の説明は、ジム・マーティンが『English Text』等で 1990 年代前半まで提案していた 4 段階言語記号論的モデルを用いて行う。

## 日本語と英語間における翻訳から再考する「名詞化」

**長沼美香子**
**立教大学　(mikako@katch.ne.jp)**

**本稿の目的は、翻訳における「名詞化」に焦点を合わせて、その諸相を整理することである。選択体系機能言語学（SFL）では、名詞化は「文法的比喩を作り出す最も強力な語彙文法資源」（Halliday 1994: 352）として論じられる。そして、英語における「もの（Thing）」としての名詞（群）を中心に分析されるが、「こと（Fact）」としての名詞（群）にはあまり言及しない。筆者は日本語における名詞化は英語での具現や機能とはシンメトリーではないのではないかと感じている。これは翻訳者としての経験則であるが、SFL での英語を中心とする分析では、翻訳での名詞化の問題を扱えないことが多いのである。そもそも名詞化の定義もあいまいである。そこで本稿では、多様な名詞化がどのように具現され機能するのかを、日本語と英語との間の翻訳という視点から考えてみたい。**

## Rethinking nominalization in Japanese/English translation

**Mikako Naganuma**
**Rikkyo University (mikako@katch.ne.jp)**

The paper aims to review “nominalization”, focusing on different types of nominalization in translation. Systemic Functional Linguistics (SFL) refers to nominalization as “the single most powerful resource for creating grammatical metaphor” (Halliday 1994: 352). In the SFL analyses of English, nominalization is examined mainly as a “Thing” but rarely as a “Fact”. The author as a translator has experienced that nominalization is often realized and functions asymmetrically in Japanese and in English. Since SFL has discussed nominalization mainly in English, resources of nominalization in translation have not fully been studied with regard to their realization and function. The present paper will explore how various nominalizations are realized and how they function from a perspective of translation between Japanese and English.

# 漢文（文言）の過程構成・テーマ構造と結束性

The transitivity, thematic structure, and cohesion in classical Chinese texts

佐藤勝之
武庫川女子大学
satokats@mukogawa-u.ac.jp

本発表は、日本の中学・高等学校の国語科教育でなじみ深い漢文（古典中国語、文言）の代表的なテクストを観念構成とテクスト形成および結束性の観点から記述しながらその特徴を探り、あわせての選択体系理論の可能性を追究するものである。

漢文の対人性は、「将」（まさに～せんとす）(‘will’)、「当」（まさに～すべし）(‘should’)、「応」（まさに～すべし）（当然・推定）、「須」（すべからく～すべし）(‘need to’)、「宜」（よろしく～すべし）（適当）など法助動詞的な働きをするものや、「矣」（断定・推定）、「焉」（語調を整える）、「哉」（感嘆・反問・疑問）、「乎」（疑問・感嘆・反問）、「耶」（疑問・反問・感嘆）など終助詞的な働きをするものなど、「助字（助辞）」を適宜加えることでその働きを示し、また、定性がなく主語も義務的ではない。したがって、英語を対象とした選択体系の分析の方法をそのまま当てはめることは難しい。

テクスト性に関しては、（言語類型論で中国語が主題-題述型の言語だと言われる、その意味において）「主題」の認定は容易である。しかし、陳述節でも主語がない点を重く見れば、IFG の枠組みをそのまま適用はできない。（日本語のもつ問題とも重なると思われる。）

過程構成に関しては、ほぼ IFG を充当できる。ただし、日本語と同様に形容詞が単独で「述語」となるので、これについての過程型を増やす必要があるだろう。

さらに、結束関係についても考えてみる。

以上、テクスト例とその分析を提示しながら、システミックの可能性を探ってみたい。

# インターパーソナルからみたテクスト分析

北陸大学
船本弘史

言語の一般原理についての見方をまとめた理論と言語の固有性に基づく記述が、それぞれの側面から言語の姿を「総合する」ための枠組みであるとすれば、テクスト分析は、これらが提示する見方を「実践する」ことであり、理論と記述の修正・発展に寄与するとともに関連領域への応用につながる第一歩であるといえよう。

本ワークシップは、日本語テクストの分析を実践する枠組みとして何が必要で何が修正されるべきかを考察し、日本語研究の立場からシステミック理論を検証することが目的である。本発表では特に、（1）対人的メタ機能は日本語のテクスト構成に参画しているのか、（2）参画しているとすれば対人的メタ機能とテクスト形成的機能との関わりはいかなるものであるか、および（3）上記の観察からシステミック理論の枠組みはなんらかの修正が必要であるか、について議論する。日本語の記述は、キョート・グラマーでまとめられた枠組みを用い、これに基づくテクスト分析の実践をとおして SFL の発展に寄与する可能性をさぐる。

# アプレイザル分析の困難
## ——誰がアプレイザルを評価するのか——

愛知学院大学　教養部
鷲嶽正道

アプレイザル（Appraisal）は、1990 年代から J. R. Martin や Peter White らを中心に議論・構築されてきた研究領域であり、話し手／書き手の感情や価値判断、相互作用者どうしの価値観の共有、価値判断の正当性の構築／維持にかかわる理論である。現在、選択体系機能理論（Systemic Functional Theory）の理論枠組内への位置づけがなされ、システムネットワークの拡充も進んでいる。

従来の研究ではあまり顧みられることのなかった、これらの意味領域を組み入れることにより、選択体系機能理論は、コンテクストの中で実際に用いられている言語をより包括的に理解できる、より潤沢な理論へと発展している。

しかしながら、アプレイザルを用いて実際にテクストを分析してみると、一筋縄ではいかないことに気づく。例えば、話し手／書き手のコンテクストと、聞き手／読み手のコンテクストが異なれば、当然アプレイザルの解釈に齟齬が生じうる。また、同じテクストであっても、聞き手／読み手が異なれば、アプレイザルから受ける感情も異なる。

そこで、本発表では、アプレイザル分析の根底にある問題として、話し手／書き手によるアプレイザルを、聞き手／読み手がどの程度正確に解釈することができるのか、またその解釈は誰のものなのかを議論する。